

衣装の発生と伝播

——軍服のブレイディングの図象性を中心として——

今木 加代子

はじめに

兼々、きらびやかに装飾される軍服の Braiding・肋骨飾りは、何故そのように Do sign (Design) されなければならないのか、その発生の動機、Root に疑問を抱いていた。又洋服の特に Jacket 類には、極く当然の如くに Braiding されるその材は、Braid であれ Ribbon であれ、差ほどの相違も意識せずに使っていた。しかし先号の Coiffe でも触れる如く、古来大きく生活文化とは、絶えず揺れ動く海洋・船上を背景に生ずる Idea. Design と、さまざまな環境の変化を見ながらも、大地を背景に発展展開する Idea. Design に、大別されされると述べており、その海陸両用の Idea 源を更に熟知したいものと、2003年の夏、豊かな海岸沿いに発展建国される Ireland の研修に出た。

中でも、漁に出た夫の不慮の災難時にも目印になるよう、11種の文様を編み分けると云われる Alain 島の Alain Sweater に、又 Coke. Dublin などの幾つかの街は、海の男 Viking が築いた一大都市、今尚古い倉庫などが建ち並ぶ、北西部湾岸沿いの港街 Sligo で、Braid の必然性についても手掛かりを得ることが出来、その伝播と共に解明しようとする。

1 Rope・綱の Design 性について

Rope を辞書によると、ロープ、綱、なわ《束縛・絆などの象徴》(1本の)ロープ《thread. string. cord. rope. cable の順に太くなる》……とあり、その一つには(仕事などの)こつ、しかた;内情《帆船のかじ取りロープから》がある。

又漢字の綱については、岡の原字は、太づなを描いた象形文字、それに山印を加えたのが岡の字で、丈夫で固い山、綱は「糸+音符岡」の会意兼形声文字で、丈夫でかたい太づなのこと、縄は、よったなわ、紐は、柔らかなひも、

となっており、Thread・糸の細く柔らかい植物の材、Cable・錨綱など最強の機能性を要する鉱物の材と、硬弱、細い太いを問わず、線状の材を撚り合わせたものとなってくる。

写真1 Aran 諸島は、石灰岩の岩盤に覆われた細長い三つの島からなり、住む人々は長い時間をかけ、土を集め、牧草を育て、羊や牛を飼育出来るようにしたとあり、石の間に僅かに根をはり育つじゃがいもが大切な食料源であり、多くは漁猟が主流となっている。Aran 諸島最大の島 Inishmor の Aron's Heritage Centre (伝統資料館)には、筆頭に当 Rope の展示が

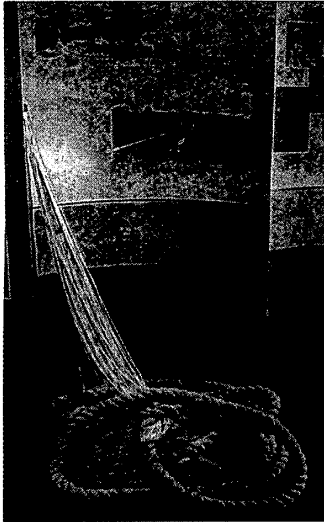


写真1 Aran's Heritage Centre 展示品★

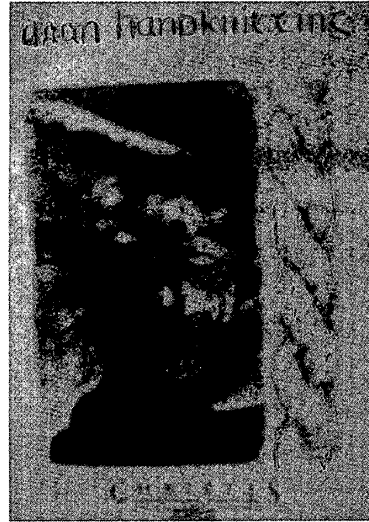


写真2 Aran Handknitting の商標



写真3 Aran Sweater 著者所蔵



写真7 Boyle 修道院の Arch にある Rope の図象★

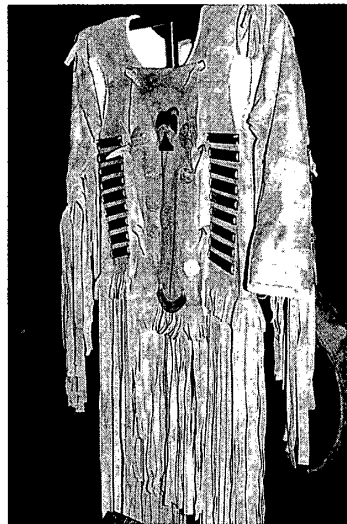


写真8 Yakut の Shaman の呪衣 (国立民族学博物館所蔵)★



写真9 教会の Fresco 画 (Bulgaria)



写真13 Bulgaria の衛兵



写真14 日本の軍服 (北海道開拓記念館所蔵) ★

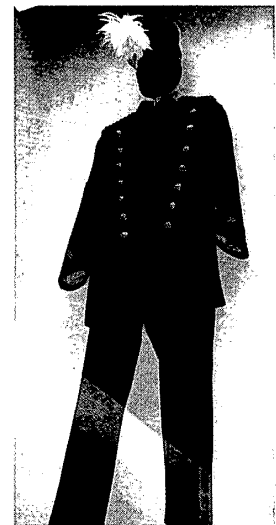


写真15 日本の軍服 (北海道開拓記念館所蔵) ★

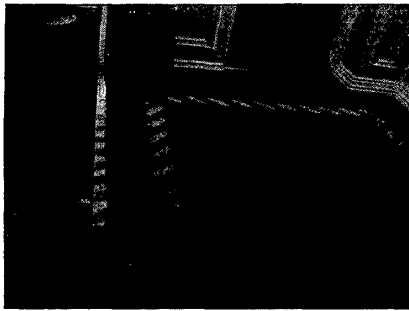


写真 4 TOWER HOTEL (Sligo)
廊下の絨毯★



写真 5 TOWER HOTEL (Sligo)
客室の Curtain★

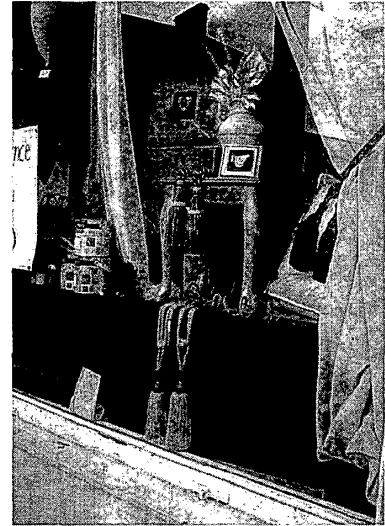


写真 6 Show window (Sligo)
の Curtain holder★



写真 10 Polandの貴族の Coat
〔民族衣装〕ラシネー原著



写真 11 Indeianの人形(Sligo
の Show window)★



写真 12 Denmark の護衛兵
(Post card)



写真 16・17 Franceの警備員と
警官(Post card)



写真 18・19 Franceの兵士と郵便
配達人(Post card)

★印は著者撮影

Blade からの変化と云えるのではなからうか……。

写真 16・17 France 市民の制服であり、写真 16 は、銃を持った警備員で 5 段の金釦が、17 は警官で、7 段の金釦が Doubl についており、帽子は何れも丸い Crown である。

写真 18・19 同じく France の写真 18 は兵士・軍人であり 6 段の金釦、写真 19 は郵便配達員で 7 段の金釦の Doubl となっている。

Braid ; Blade については、辞書にも未研究の面が記されており、未だ未だ、各国、各時代、使われている Braid の材を見、列挙の必要性が一課題としても、取り合えずその発生は、写真 7 Shaman の呪衣に見る〈肋骨の保護〉として付けられる Shaman 的 Accessory と云え、軍服には魔性的祈願・願望に満ち満ちた必需のものとして付けられている。又中世には聖職者、貴族にも、国家社会の統治的地位の誇示・象徴としても施されるものと云えるのではなからうか……。やがて現代に入ると Doubl の金釦に変わり、国家公務員、官吏の征服としても広い伝播が見られると云うのは未だ速すぎるであろうか……。

3 伝播の一つの要因

軍服にみる Braiding は、胸にある肋骨飾りだけで無く、袖口、肩先の肩章・Epaulette にも多様な魔性を含みつつ付けられている。その一つに蛇と目の図象があり、先日刊行された柳生悦子著「日本海軍軍装図鑑」の中には多くの蛇と目のついた袖口がある。

この図象だけでも、その発生源を辿れば、Egypt 或いは、Tigris. Euphrates 川を中心に栄える Mesopotamia 文明に迄も溯らなければならない。しかし丁度、先号に記す France の民族衣装の袖一面には、金 Mogol で Gorgeous に、各様の鳥の目が Braiding されている。

これらは、Viking が France と戦勝の後に得た北西 France の地 Normandie で Design されており（当地に定住した Viking が Norman 人と呼ばれる）、騎馬民族・Mongol 帝国の象徴の如き Gorgeous な金 Mogol で、海と陸の接点とも云える泥地で自由自在に生息出来、神格化される蛇と、千里眼として神格化される鳥の目を、France 民族衣装の袖にべったりと施している。

これらは Coiffe の Lace と共に、海の男 Viking の生み出す Design と見、民族衣裳としては、初めての Braiding と解釈している。その後も、Norman 人と名を変えた Viking は、各地の民族、伝統、文化をも大事に柔軟に融合しつつ、Ingles の国王の地位も得、一部の Viking は東欧の各地にも定住、そして又、Rossiya の Kiev 公国をも建設しており、これらのことは幾冊かの本に「冒険・建国の民」ノルマン人としても記されている。それらの国、特に Ingles と Rossiya の軍服には、当 Blade が各様に Do sign されており、わが国でも明治維新以後、Ingles の軍服を取り入れている。

ま と め

簡単にこのような伝播を見ても、**Rope** とは、海洋生活に長けた **Viking** にもまつわる、筆頭の生活民具と云え、**Braid** の材も又、網状に撚られたものでなくてはならない、衣装の中では筆頭の自称海産の文化と見ており、**Ribbon** とは、天空にかかる虹の如き魔性性を見る、自称陸産の文化と解釈している。それ故に、洋服の **Blade** と **Ribbon** は、はっきりと使い分けがきくのではなかろうか……。

文化は大きく、アランとフンの融合との一文を記憶している。確かに当稿にも見てきた如く、海洋の生活を背景とした Alan 島の **Rope** と、Alencon (西フランス) の **Lace**…、遊牧生活を背景としたフンの金 **Mogole** と **Ribbon** など、細く長い衣の材の発生源にも、海陸の区分けも見えて来る。

今後は、衣装の発生と伝播を類型的に列挙、区分しつつ、具象例に乏しいとされる民族移動の痕跡の証となる程迄の書、衣の民族学的な一冊を……との試案に耽っている。

参考文献

- Nellie O Cleirigh **Hardship & High Living** Portobello Press
Irishwomen's lives 1808-1923
- Guide to the ARAN ISLANDS MAPS INCLUDED
- Deirdre MeQuillan **the Aran sweater** Appletree Press
- A・ラシネ原著 石山 彰監修 世界の服飾1 民族衣装 (株) マール社
柳生悦子著 日本海軍軍装図鑑 幕末・明治から太平洋戦争まで 並木書房
- G・ファーバー著 片岡哲史・戸叶訳 ヴァイキングの足跡「海賊・冒険・建国の民」ノルマン
人の謎 アリアドネ企画
- ジョン・ヘイウッド著 井村君江監修 ケルト歴史地図 東京書籍
- 小泉龍人著 世界の考古学⑰ 都市誕生の考古学 同成社
- 今木加代子著 衣装のルーツを求めて デザインのヘソ・シャマニズム 協和印刷
- ウノ・ハルバア著 田中克彦訳 シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像 三省堂